

開会挨拶

上田：おはようございます。今日も朝から雨が降ってしまいましたが、お集まりいただきどうもありがとうございます。アジア地域研究所の所長をしています、上田と申します。昨日、「南洋と沖縄」というシンポジウムを行いまして、今日の講演をなされるお二方にもご登壇していただきました。

このプロジェクトですけれども、私立大学戦略的基盤形成支援事業という文科省のプロジェクトで行っておりまして、南洋と南シナ海インド洋というような、日本から南のほうに広がる海を対象としております。今、南シナ海等の海の世界では地政学というか、海政学というか、海を巡るポリティクスという形で非常に緊張しています。それを文化的な人の交流、つながりのようなものをもう一度歴史をさかのぼって発見することによって、今のこうした情勢に対して、違う見方を出せられたらと思っています。プロジェクトを立てたときには、そこまで深刻ではなかったのですが、だんだんそのような意味合いが出てきたように思います。

今回取り上げます沖縄と南洋とは、人の流れとして非常に強いものがありました。芝居の面におきましては、沖縄から琉球芝居の巡業という形で、南洋のほうに多くの劇団などが出かけていったということが、昨日の中でもお話で登場しております。

その背景として、戦前第1次世界大戦の後、南洋が日本の委任統治領になったことがあります。こうして南洋にはアジア太平洋戦争に敗れるまで、多くの日本人が渡っていったのですが、その8割くらいが沖縄の方であった。そのような方々は、沖縄から来た、琉球の芝居というものを自分たちの故郷とのつながりのようなものとして感じ、非常に心待ちにしていたのだということを、昨日のシンポジウムの中では強く感じることができました。逆に、沖縄のほうの琉球芝居そのものは、南洋の影響をあまり受けなかったのではないかと、という結論になりました。なかったということを証明するのは大変難しかったわけで、そうした意味で大きな成果があったというふうに思っています。

今日はまさに、その琉球の芝居というものの神髄についてお話をいただき、演奏もしていただくことになっております。ぜひ心ゆくまで堪能していただければというふうに思います。進行はアジア地域研究所所員の細井が務めますので、後の進行のほうよろしく願いたいと思います。簡単ですけれどあいさつに代えさせていただきますと思います。

沖縄芝居に見る大衆娯楽の「近代」